

会報 '83 春

家庭科の男女共修をすすめる会

連絡先
東京都渋谷区代々木2-21-11
婦人会館内 T151
振替 東京九一八九一
発行 一九八三年三月一二日

一九八三年度総会のおしらせ

〈とき〉

四月二日(土) 午後一時半～四時半

〈ところ〉

婦人会館

下車駅 国電代々木または新宿
小田急線南新宿

電話〇三・三七〇・〇二三八

〈内容〉

I 報告と話し合い

「夫と妻の家事分担の実態」

★報告 婦人教養セミナーの会井上節子さん
神奈川県 婦人教養セミナー参加者によつてつくられた婦人教養セミナーの会では、県の委託を受けて「家庭における家事労働の現状と意識について」というテーマで研究することになり、家事についての意識調査を行い

ました。その調査結果は一冊の本(婦人教養セミナーの会編著・発行「新しい家庭をめざして 家事労働のゆくえ」)にまとめられましたが、この結果をもとにして、現在各家庭で夫と妻はどのように家事を分担しているか報告していただきます。

★あなたのお宅ではどのように家事を分担しているのでしょうか? よい例、失敗例をご存じですか? うまく分担するにはどうしたらよいでしょうか? 報告を聞いてから話し合ってみましょう。

II 議事

1. 一九八二年度運動のまとめ
2. 一九八三年度運動方針
3. 一九八二年度決算
4. 一九八三年度予算
5. 世話人
6. その他

もくじ

総会のおしらせ	(1)
授業参観報告	(2)
私たちの新生活	(4)
優生保護法問題に関し五政党の方策を きく会	(5)
共修ということばについて	(6)
日教組教研家庭科分科会	(8)
日教組教研女子教育分科会	(8)
家教連の冬合宿	(9)
ひとの会での共修問題へのとりくみ	(10)
Weでは	(11)
高齢化社会をよくする女性の会から	(11)
今、体制のめざす女子教育	(12)
新東京行動計画説明会から	(13)
婦人問題ブロック会議で	(14)
世話人会報告	(15)
おしらせとお願い	(16)

一九八五年の差別撤廃条約批准までにどれだけのことができるかは、八三年度の運動によつてきまりそうです。逆の動きも強まっていますから、私たちはもっともっと運動をすすめる必要があります。大事なときです。ぜひご出席ください。

授 業 参 観 報 告

一月十八日 午前一〇時～正午

昭島市立瑞雲中学校被服室で

内 容 中学三年・男女共学・「保育」

授業者 武市成子

(記録・芦谷 薫)

安達真理子さんの感想

男女共学の家庭科の授業というのを、初めて参観させていただいた。保育の授業だったので、男女共学で学ぶことがとても自然なことに感じられ、「これが本当の保育の授業だなあ」と思った。グループ学習では、男女が協力して課題に取り組んでおり、実際の保育のときにも、このように自然に男女が協力できる姿勢がつけられるような気がした。また、豊富な資料を使ってグル

公開授業の一月十八日(火)は、あいにく朝から雨と雪の寒い日であったが、十六名の参加者が昭島市立瑞雲中学校に集った。

今回は、中学「技術・家庭」の授業ということで中学校教師が多く、学生や保父、そして大阪西成高校の家庭科教師宮崎さんも遠方より泊りがけで参加された。

始業ベルが鳴る少し前に三年生の男女生徒が、三々五々被服室に集まってきた。実に当

りで調べたことは、理解を深め、実践力となるであろう。

現代の中学生は、兄弟数が少なく、子供が生まれ成長するのを目にすることも少ない。そのような中学生が、生育史を作成することによって自分の成長の歴史を知ることができ、そして、生育史や母子手帳を利用しながら友人と話し合うことによって、成長の過程が一層よく理解できる。これらは、保育を学習する上で、効果的な方法だと思ふ。

ら渡された。

公開授業でなければ、保健室や職員室に出むき、学校に居るおとなから体験を聞いたりアドバイスをうけたりするのだけれど、今日は、私達参観者のために部屋を出ないことが条件となった。そのためか幾分おとなしくひかえめな表情で話し合ったり資料を見ていた。いつもどおりのニギヤカな彼らであるはずなんだそう。いつものようにアクティブに活動できないので、とまどっている様子。中には、ニギヤカに進められているところもある。前に並んだ男子三人が、くると後を向いて頭を寄せ合っているところが多かった。

生徒の書いた生育史を見せてもらった。

妊娠中の健康状態に気をつけたこと、妊娠とわかった時の感想(父母)、出産の状況(妊娠月数、出産時間)、出生時の身長体重、出生時の感想(父母)、名前の由来、成長について(生歯、歩き始め、はじめてしゃべったこと)等。生育史を書かなかった生徒は、一日保父、保母レポートを書いている。

五十分の授業は、あっという間に過ぎた。この次までに、模造紙にまとめ発表の準備をしておくこと、発表はひとグループ五分と、次回のお知らせで授業は終わった。どんな発表になるのかな。次回も参観できたらと、ちょ

斎藤美保子さんの感想

男女共修公開授業「保育」を参観した。「ヒトが人間になるために」親は、回りの人々は、社会はどのようにそれを保障しているのか」という内容であった。

本時は、グループに分かれ、様々な資料をもとに作業をしていた。中でも感激したことは「聞きとり」であった。妊娠なさっている先生に、子育て奮闘中の先生に、保障の内容を聞いてくるのである。先生方の主体性を生徒が問いかけてくるのである。

つぱり残念だった。

その後で、武市先生と参加者で懇談をした。そこで出た意見や感想を記して報告を終えたい。

瑞雲中は新設二年目で、今の三年生の三分の二は前の中学から武市先生に伴われて移ってきた生徒達で三年間共学の家庭科・技術科を学んできている。三分の一の生徒達は、最初は女子も含めて、男子も居る家庭科の授業に、とまどっていた様子だったが、三分の二の共学経験者の「当り前」という様子や共学を体験していくなかで、今ではなじんでいる。

り前の顔をして(当り前なのが、当り前なんだけれど)、男女各三名づつ位のグループ分けがしてあるようで、横に三人並んだ男女が、一列交替に座っている。

今日の授業のテーマは「健康なヒトをうむために」である。保育の授業は既に六時間やっけてきており、青春期の男女交際では、男女の性意識、男女の生理、男女交際を、Ⅱヒトから人間へでは、ヒトの誕生とその問題点を学習しての今日の授業である。その後、人間になるために、私たちをめぐる現状と続きⅢ家族と私でしめくられる予定だそう。

授業は、今日の進め方の説明から始められた。黒板に今日のテーマと、次の授業時にグループで発表するための小テーマが書かれた。小テーマは、①父母や家族はどんな配慮をしているか ②社会はどんな保障をしているか(うまれるまで) ③同(うまれてから)である。六つのグループ内で相談して、これらの小テーマからひとつを選んで発表のために調べたり模造紙に書いたりする。武市先生が用意した生徒用資料は、テーマ①ではクラスの仲間が夏休みに書いた生育史。②③は、母子手帳、市の便利帳、子ども白書、婦人労働ガイドブック、都教組手帳、小六法など。生育史は、他の生徒が見ることの了承をとってか

そのことを通して、生徒達は、先生も「親」なんだ。こういう面も先生にはあったのか、という共感を胸の中に刻み付けることであろう。そればかりではない。生徒もまた、自ら愛されているといった自覚も育むことになるに違いない。学校教育は、生きた教材として、大いに「教師」もどんどん活用してもらいたいと思う。

男子生徒の「生まれてからがたいへんだ。」という声が響く。男子生徒が居ることによって、こうも人間くさくなるものか、と深い感動で終えた一日であった。

武市先生は、六年間共学を実践されてきているが、「保育」の授業は、総仕上げという意味もあり、授業の雰囲気が一番よいということであった。家族関係とか性意識とかの点でも生徒達が一番ぶつかっている問題を扱うという点でも一番乗ってくるということであった。

生徒の姿が自然でいい感じで、こういうのをわざわざ分ける方がおかしいと皆感じたようだった。

八王子からは二中学から参加があったが、三年の一・二学期を除いて全面共修校、三年

の二時間を除いて全面共修校であった。一年生で食物工と木工のみ共学という中学の教師からは保育に入ると女子から、男子の意見を聞きたいという意見が出る。教員の意識が低いので、全面共学をやりたいという圧力がかかるのではとの心配が出された。共学実施校からは、教員、校長への呼びかけ、PRはあらゆる機会をつかまえてやった、一・二年

私たちの新生活

静岡県 武田 憲幸

新たな共同生活の中でお互いの自立の中味をどう創るか、考えています。無論考えるだけでは駄目で実践あるのですが、後で述べるような方向を目指した実践を行いたいわけです。「共働き」をただ守りぬく、お互い無理をしながら、我慢をしいしい何とかやってゆくだけでは駄目だと思ふからです。さて、家事労働・育児をどうするか、がさしあ

で衣食を共学でやった上での保育の授業と、保育だけ共学の授業とではちがうのではないかとという意見が出される。そして女子だけの家庭科は、性別役割分担を生徒に肯定させるということが実情交換の中で確かめられた。高校の方では、今年から家庭一般四単位が完全共修になった西成高校、生活科として社会科家庭科の総合教科を実施している南葛飾

高校(定)の様子が出された。瑞雲中学から高校に入った男子生徒は「家庭科がない」ことに驚き、泡喰って報告に来るといふ。そんな生徒が高校での共修を要求していく中心になり得るのではないかという話も出された。内容面では、優生保護法改悪の動きがある中、優生思想、障害者差別の問題をどう扱うのかについて意見交換された。

の共同生活の中味です。それらは分担して行うのがあたりまえのことで、「生理的差異」によりできること、できないことがあります。がお互い過重労働を強いられぬようやってゆきます。家事についてはお互いの努力で十分に分担は可能です。また男の家事労働を「恥」とする「社会通念」は崩れつつあり、大きな問題は感じません。(しかし、未だ残る「家事は女の仕事」という偏見の克服を個の問題だけではなしに全体の問題として訴えてゆきます。)しかし、育児の問題となると私たちは共同生活を実践する中で「育児は女の仕事だ」との社会通念、またその「社会通念」を肯とする現実の変革を志向せねばなりません。子育てを「共働き」の中で、終えることは中味として肉親にかなりの負担をかけ、お互いに無理をしあうことです。が、そうした個々

の努力で、やりぬけばよいとするのは妥当なものでしょうか? 女性が社会的労働に携わること、妨げる足枷として現実の「子育て」があるのでは? と思います。私は子育てを女性がやらなくともよい、と言っているのではありません。女性だけに押しつけられている「子育て」の現状、余りに女性に「頼りすぎ」な現状を問題視しているのです。女性には育児休暇が認められても男性にはない現状、保育所づくり・学童保育の運動が問いかける中味を再び考えたいのです。私たちの共同生活は、従って、こうした方向を実践的に目指すわけです。例えば「育児は女性の仕事」といった社会通念の中の差別性を告発し、実践的な運動づくりを目指すわけです。決意表明的な部分をそれだけに終わらせずに中味あるものにしてゆきます。

国際婦人年日本大会の決議を 実現するための連絡会主催

「優生保護法改正問題 に 関し五政党の方策を きく会」の概要報告

和田 典子

一月二十九日(午後二時~四時三〇分)参議院議員会館第一会議室にて、右記の会がもたれ、計一五〇名くらいが参加して、左の時程にそれぞれ各党からの報告とそれに対する質疑応答が行なわれました。

開会に先立って「連絡会」より臨調への申し入れ、新内閣に対して要望を出す件、優生保護法改悪反対の申し入れを厚相に行った件についての報告を受けたあと、各団体からも本日の主題についてのとりくみが報告され、一月七日現在、地方議会では七九が賛成、四九が反対決議をあげているというきびしい情勢があらかになりました。

集会は、まづ「連絡会」が提出した「改訂反対」の趣旨説明からはじめられ、つづいて

各党議員の発言にうつりました。そのあらましは次の通りです。

自由民主党婦人局次長

森山 真弓議員(参議院)

党内意見が一致しているわけではないが、婦人議員は全員反対の意向、さる十二月下旬の都道府県婦人部長会議の一致した意見として六人の議員も署名、婦人の意見を尊重するようにと厚相にも要望している。現在検討中で国会提出を目標にしているが、短絡的にやることは阻止する。但し、女性の動きが前回(昭和四八年)より弱いとの評がある。

質疑で山口淑子、扇千景氏が「生命尊重国会議員連盟」賛成派に参加しているのは矛盾しているとの指摘がされた。

日本社会党婦人対策委員長

田中寿美子議員(参議院)

「連絡会」の意見と同じで①中絶は個人の決定によるべきで国は介入すべきでない②優生保護思想に反対③中絶はすべて経済的自立不能と深くかわる④改正が改憲決議とセットに出ている点が危険などの反対理由をのべ、自民党内の分裂から議員立法となる可能性にもふれ、国会対策委に働きかけると発言。

質疑では反対署名の提出は国会請願にするのが有効である。国際婦人年推進議員連盟に

は男子も多いので反対決議はむづかしいが努力する、などが明らかにされた。

公明党国民生活局長

渡部 通子議員(参議院)

昨年の党大会で反対決議した。経済的理由を削っても社会的混乱はむしろ増える、環境づくりこそ重要、当事者の婦人、医者が反対している問題を軽々にきめるべきでない。生死の判定でさえ定まらない時に、部分的な改訂は反対。母子保健法の改正とセットにする動きがあるから警戒が必要との指摘があった。

民社党政策審議会部長

安達 裕志 氏

前回の改訂には反対したが、法案未提出の現段階では「検討する」とより言えぬ、今国会に出る見通しはない。地方議会には独自に判断を任せ、同盟婦人部の意見もきいている。

日本共産党社会労働委員

沓脱タケ子議員(参議院)

提案させない闘いが重要、生活実態を無視、宗教理念の政治へのもちこみ、国際潮流に反する、婦人、医療関係に相談せず法制審にもかけぬ非民主的な手続、政治的背景など見せてせない。優生思想の現行法にも問題があるが、現段階では改訂反対。春斗と結合して闘う。

「共修」ということばについて

世話人会

前号の世話人会報告でお知らせしましたように、世話人会では「共修」ということばの使い方について検討し、結論を出しました。「共修」というべきか「共学」を使うべきかということについては、これまでも何度か議論がありましたが、82年夏の説明について会員から強い疑問が出されたのをきっかけに改めて考えてみたのです。もっとも、ことばは世の中の動きにつれて変わって行くものですし、運動は文字通り動いて行くものですから、将来また検討し直す必要は起るかもしれませんが。

結論を先に申しあげましょう。

家庭科の男女共修をすすめる会は、原則として「共修」ということばを使って行きます。「共修」ということばの意味は、男女とも必修科目として、同じ教室でいっしょに同じ

内容の学習をすることです。(別学校では、「同じ教室でいっしょに」というわけには行きませんが、やはり男女とも必修科目として同じ内容の学習をすべきです。)

そして、家庭科の男女共修をすすめる会では、男女で学ぶのにふさわしい内容によって共修をすすめるなければならないと考えます。

この結論を出すまでに、「共修」ということばがどのように使われて来たかを検討しました。

「共修」ということばの始まり

京都府で使われるようになるまでは、一般の人の目にふれることのなかったことばで、辞書にも載っておらず、一般に認められた意味・用法はなかったと考えられます。

京都府で高校「家庭一般」を男女いっしょに学習させようということになったときに、「別学校でも男女ともに必修科目として同じ内容の学習をさせる」ということも含めて、「共修」という新しいことばを使うようになりました。ことばの定義がはっきりしたかたちで発表されたことはありませんでしたが、共学校では当然男女いっしょに学ぶことと考えられて使われたのです。

高校「家庭一般」と中学「技術・家庭」を男女いっしょに学習させるための全国的な運動をしようという動きが東京で起ったとき、京都の例にならって、京都と同じ意味で「共修」ということばを使うことを決め、このことばを積極的にひろめようとなりました。

その頃、マスコミにはぼつぼつ「家庭科の男女共修」ということばが現われるようになりましたが、「家庭科の男女共学」ということばは見られませんでした。家庭科教育の専門家の中でも、男女で学ぶ家庭科についての発言はまだ少く、「共修」「共学」の使い方の違いは目につきました。

「共修」ということばについての再検討

「共修」ということばが一般にある程度ひろまってから、「共修」などというあいまいなことばを使うべきではない」という批判がきかれるようになりました。そして、文部省側が「共修」はよいが「共学」はよくない」といって、せっかく「相互乗入れ」がきまった「技術・家庭」を男女別に学習させるよう指導しているという情報は衝撃的でした。

この段階で、世話人会でも、集会でも、ことばの使い方についての議論がくり返されました。78年の総会では「男女別の学習でよ

い」と言われなかったために「共学」ということばを使う」ということになりましたが、その後世話人会で検討を続け、一般には「共修」ということばが当初の私たちの意図通り「男女いっしょに学ぶ」という意味で使われているところから、「共修」「共学」ということばはケースバイケースで使って行こう」「なるべく「共修」ということばには注釈をつけて使おう」ということになりました。

(パンフレット「中学校「技術・家庭」の男女共学をどうすすめるか」は、「別学で」という指導が行われていることを強く意識して「共学」を使いました。)

「共修」「共学」ということばの現在での使われ方

「家庭科の男女共学」ということばは「男女の生徒が、同じ教室で、同じ教師から、同じ教育内容を学ぶこと」と定義されて、家庭科教育の専門家によって使われていますが、「教科について「共学」ということばを使うべきではない」という少数意見もあります。

けれども専門家以外——マスコミ、自治体、婦人団体、婦人問題の専門家等——では「家庭科の男女共学」ということばは使われず、「家庭科の男女共修」ということばが、「共

学」との区別は意識されずに使われています。行動計画や決議等の中に使われている「家庭科の男女共修」ということばは、「別学でもよい」と考えられてとり入れられたわけではありません。ただし、「共修」に必修の意味はないと考えて「共修かつ必修」ということばを使う例が出て来ました。(「会」として発表した文章の中にも、この点で誤解を招くようなものがありました。)

従って一般の人びとは「家庭科の男女共学」ということばにはなじみがなく、「共修」というと、「家庭科のことだな」と思われるようになっていきます。

そこで、最初に書いたような結論を出しました。

ひろく一般の人びとの協力を得て運動をすすめて行くためには、一般に知られるようになった「共修」ということばを、使いはじめたときと同じ意味で使い続けるほうが有効です。

これは「共学」ということばを使うことを否定するものではありません。

「共通必修」ということを特に考えず「男女でいっしょに学ぶ」という意味で使うなら

ば「男女共学」でよいし、個人としてのことばの使い方まで規制する必要はないと考えられますから。

どうぞ皆さまもこのことを十分理解してくださいますようお願いいたします。

結論のもうひとつ、「男女で学ぶのにふさわしい内容」ということばの扱いについて説明いたします。

81年の総会で決議文の検討をしたときに、「家庭科の男女共修」というと「今のままの内容で男女いっしょにやるのか」と反発を受けるので、「共修」について説明するときには必ず「男女で学ぶのにふさわしい内容」ということばを入れてほしい」という提案が可決されました。それ以後「男女共修」ということばに続けて「男女とも必修科目として、いっしょに、男女で学ぶのにふさわしい内容の学習をすること」という注釈をつけるようにして来ましたが、これでは「共修」ということばの定義に学習内容まで含まれているように見えますので、これからは誤解を受けにくいような表現にして、私たちが学習内容も改めようとしていることをうたえて行きます。

他 団 体 の 動 き

日教組・教育研究全国集会 家庭科分科会の報告

和田 典子

△討議されたこと▽

一月十日～十三日にかけて行なわれた家庭科分科会には、小・中・高あわせて四八篇の報告書が全国から提出されました。しかし参加者は例年にくらべて少なく約百五十名にとどまりました。

討議は、次の柱にそって現場の実践をふまえ、四日間息つくひまもないほどのスケジュールで進められました。

1. 基調提案（情勢、研究の歩み、今次集会の課題など）
2. 家庭科教育をめぐる情勢をどうとらえるか（子ども、家庭、地域、家庭政策、教育をめぐる情勢など）
3. 小・中・高別にわかれて、何を、どう

教えるか、を実践的に検討する。

4. 教科書、学習指導要領の検討
5. 「男女共学」の教育内容についての討議（男女とも最低必要な内容は何か。小・中・高の系統性は？）
6. 「男女共学」の今日的意義と課題
7. これからの研究・運動の進め方。

△男女共学に関する研究、協議▽

共学の実践報告は、中学校が北海道、秋田、福島、東京、三重、京都、広島、佐賀、長崎、鹿児島。高校では北海道、長野、東京、の三都道府県から出されました。小学校は一二篇すべてが共学ですから、全レポートの半数は共学家庭科に関するものであったことになり、中学校を中心にした共学の進展は、目を見はるものがあります。

内容は、中学校では食物のほかに、三年の保育が増えました。また、高校の三篇は「家庭一般」の全面共学の安定した報告でしたが、別学ながら共学をめざして「父性」をとり上げた保育実践もあり注目すべきものでした。

③実践の理論化を深める、④今後の課題と展望の4つの柱に基づいて行われました。

婦人をめぐる情勢をみると、中曽根内閣は軍拡の一方で「家庭基盤充実」政策を大平内閣以来受け継ぎ、福祉切り捨てなど「日本型福祉社会」を婦人の犠牲の上に実現しようとしています。また人勧凍結に見られるように、賃金を不当に低く抑え込まれた中で家計補助としての婦人のパート化が促進されています。またコンピューターなどの導入により高卒の職場が奪われている実態もあります。このような中で、子ども達に「労働権」をどう教えるのかは大切な今後の課題と思いました。

また子どもをとりまく情勢も悪くなっています。家庭崩壊がすすみ、女性の性の商品化性の荒廃の中で、愛、平和、人間の尊厳、平等ということなどを小・中・高各々の教科や教科外活動の中にどう位置づけていくのかを学校、地域ぐるみで明らかにしていく必要を感じました。その意味で東京の小・中・高を通して家庭科で愛と性をどう扱ったかというレポートは、実践の一つの試みとして他県にも影響を与えたのではないかと思います。

女子教育問題分科会では開設されて以来女性の自立とのかかわりを追求してきましたが、

自立の中にややもすると孤立という落とし穴があること、どうすれば連帯していけるのかも同時にみていくことは大切ではないかと感じました。

最後に教科書洗い直しなどで、石垣りんの詩などがやり玉にあげますが、文学教材としての独自性、国語教材としての系統性をふまえることが確認されたことは、文学が好きに私にとって大変うれしいことでした。

家教連の冬合宿の報告

—家庭科の男女共学をどう
すすめるか—のテーマで行う

中沢美智代

◆はじめに 12月26・27日とあわただしい中でも多数集まり、理事初め地方の（関東ブロックを中心に）会員の学習意欲を強く感じさせました。丸2日間の合宿で、盛りだくさんで、時間が不足だったのですが、ともあれ、それぞれの問題の入口に立たされ、自分を確かめる機会となったことでしょ。

◆内容 一日目の午前中は、各地の共学の実態と問題点の報告です。全国18県から回収したアンケートに基づく、高校の状況、特に実施できた所ではどんな条件があったか、詳

日教組教研 女子教育問題分科会に 参加して

齊藤 弘子

今回で7回目を迎える女子教育問題分科会に東京のレポート「男女平等の教育」の共同提案者として参加しました。レポートでは、小・中・高校の家庭科での愛と性の実践を扱いました。

分科会に提出された53本のレポートは「労働」を扱ったものが多く、労働観、労働権などを教科や教科外活動でどう教えるかを追求したもの、高校卒業生の進路追跡調査によって女子の労働実態を明らかにしたものや母親の労働実態調査などがあります。

2つ目に多いのが性を扱ったレポートで、家庭科などの教科や、特設ホームルームなどでの実践でした。

他には、中・高校における男女共学の家庭科へのとりくみ、特に中学校での保育領域の実践が労働とのつながりでレポートされたものの、教科書点検や意識調査などもありました。4日間にわたった討議は、①婦人をめぐる情勢の認識、②労働、性、保育などの実践、

細に報告されました。中学校では足立区と川崎市の共学の実態が出されました。とにかく何等かの形で、家庭科の共学が進んでいくことだけは、確かめられました。

一日目の午後はパネルディスカッションで、なぜ家庭科の男女共学が必要か、を学習しました。家庭科をとりまく情勢、親の考え、子供の実態、共学でなければいけない理由、家庭科を学ぶ必要性等々……日頃深められてない課題に迫って、執拗に討論を続けました。男女共学必要論も非常に混乱した中で転回していることがようやくわかったという感じでした。子供の自立のため論や、婦人解放のため論の矛盾でそれぞれに考え合う機会になりました。

一日目から二日目の昼にかけて、共学の食物の実践が小中高と出され、それをもとにして、共学で最低おさえない内容を確認し合いました。加工食品や添加物をどこでどれだけ教えるか、食糧問題等の社会科学的な内容はどこでとか、食と人間との関係について等々、まだ検討しなければいけない課題がたくさん残されました。

最後に、今の教科書が、国民的基礎教養をつけるにふさわしいものとなっているか、小中高の家族保育領域を通して検討しました。

どこは使えるか、又どこをどのように使っていくのが良いか等も経験交流しました。

田無ひとの会での

共修問題へのとりくみ

吉橋 麻里

私達の田無ひとの会では「教育を考える」をテーマに月一回例会を設け、会員間での発表・講師をお呼びしての討論等を行っています。メンバーは十五人ほどですが、塾講師・教員・保母さん・医師・お母さん……とバラエティに富んでおり、子どもの問題を考える時も多方面から光があてられてたいへんおもしろいです。一昨年六月に発足して以来、とりあげたテーマには、「障害児教育とは何か」「いのちをめぐって（この時は高史明氏をお呼びしました）」「私塾と公教育」「子どもとからだ」等があり、実に多様です。一見種々雑多な内容に見えますが、時を経て、子どもと教育に光をあてていくという願いが、会員間に共有されてきていると思います。

そのような中で、昨年初めて家庭科をとりあげました。そもそも学生時代より家庭科の男女共修に共鳴してきた私の友人（彼女は

中学時代、家庭科女子のみ必修に反発をおぼえデモンストレーションをしたことがあるそうです）と私が、「いつかぜひ、ひとの会でも家庭科の問題をとりあげたい」という強い希望をもっていましたので、会の活動も軌道に乗ってきた折ちょうどよいチャンスです。から、はりきって準備をすすめました。しかし男性にとって家庭科は小学校以降無縁の教科で何のことかよくわからないという場合は多く、女性もまた強く関心を抱く者はいませんでした。この場合がそうでした。この現実から、家庭科とは何なのか、というかなり具体的かつ根本的なところから、共通の認識を創っていくなければなりません。そこで十一月に私達二人で、いままでの女子のみ必修の家庭科とは何だったのかを学習指導要領及び教科書を参照しながら問題提起し、また家庭科教育の歴史・共修運動の発足と進展・共修実践例の紹介を行いました。この時は、家庭科について今日初めて考えたのでよくわからない点もあるけれど女子必修と決められてしまっているのはおかしい感じがする、文部省側が唱える「母性」とは何なのか、男女分業論とは……等様々な意見が出され、次回も引き続き考えたいという声があがりました。当日発表の中でWeも紹介しましたので、是非半田さんに来ていただいで

をお願いします。

Weでは

小田亜佐子

早いもので、この3月にWeは一周年を迎えます。82年4月号から83年2・3月号まで、本棚の一角にカラフルな背表紙が並んでいるのを見ると、Weをめぐるこの一年のあれこれ

が浮んできて感慨深いものです。家庭科の共修を目ざし、二年めさらに大きくはばくためにも、一年めの読者五千人に引き続き読者になっていただくことがぜひとも必要です。一月末の時点では、継続手続きを終えた読者はまだ少ないとのこと。購読継続・読者拡大に会員の皆様の一層のご協力をお願いしたいと思います。

三月五日には、We一周年を記念して、ウィ書房・Weの会共催の公開セミナー「学校をよみがえらせよう―家庭科の窓から」を行ないました。広く家庭科教師に呼びかけ、死に瀕した学校をよみがえらせるために家庭科では何がやれるのか、語り合う集まりです（詳しくは次号）。Weの会では今後もこうした企画を考えています。読者会ともども、よろし

高齢化社会をよくする

女性の会からの呼びかけ

嶋田 道子

これからやってくる二一世紀は別名、おばあさんの世紀とも云われます。高齢化社会の主役は女性だからです。

女性は自分自身の老いの前に、親や夫を看取り、そして自分の長い孤独な老後を生きる立場にある。それにもかかわらず、女の老いの関わりの重さ、その事実や女自身の想いは充分語られることがありませんでした。

一九八二年九月一〇日、私たちはわが国で最初の「女性による老人問題シンポジウム」を開催しましたが、そこでは多くの問題が提出されました。

まず第一に「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業の伝統がとりわけ強い日本社会において、とくに最近では「日本型福祉」「家庭基盤充実」の声が高まる中で、結局は女性のみが介護の役割を担っている事実です。

それはそのまま女の老後が、年金や資産、就労機会の乏しい貧しさに悪循環して、女の

直接お話しを伺いたいという意見が圧倒的で、交渉したところ心よく受けて下さいました。

そこで十二月は半田さん、それからやはり共修家庭科を実践していらっしゃる嶋田真澄さんのお二人を迎えて、嶋田さんには具体的な共修実践例を、半田さんには男女共修運動の誕生の経緯とその運動論等をお話しいただきました。御自身の歴史をふまえて語られた半田さんには、十一月にも、共修をすすめる会への諸資料を送っていたく等お世話になりました。誌面をかりて、あらためてお礼を申し上げます。

嶋田さんのお話の中で、中学生（子ども）の成績評価、子どもを見る視点をめぐって大いに議論がたたかわされました。また家庭科という名前をかえたらどうか、家庭とは何だろうか、子育てについて……皆から活発な意見が出、半田さんも折々意見を述べられて、これからの課題を残すとともに心よい充実感を伴って、八二年最後の会を終えました。

今年もまた家庭の問題・男と女の問題をとりあげたい、と決意をあらたにしています。

最後に、十二月の半田さんのお話をそのままテープおこした小冊子を作っていますので、御希望の方は御連絡下さい。

連絡先 ○四二四（六二）七三三七

丹誠塾気付

自立を低めています。

また、高齢化社会は、女の自立ばかりでなく男の自立が問われる社会でもある。生活者としての自立を女まかせにしてきたツケは、一挙に男自身の老いに回され、女と根を同じくする貧しさに直面しています。

さて、私たちはこのシンポジウムで、まずタブーを破り、本音を口に出すことから出発しましたが、不満をぶつけあうのが目的ではありません。両性の自立と豊かな老いの両立する高齢化社会を創造することが目的です。それで私たちは三月一八日、「高齢化社会をよくする会」を正式に発足させ、同じ日に第1回シンポジウム「高齢化社会の男と女」を開きます。皆さんの参加を待っています。

この会はまた「家庭科の男女共修をすすめる会」と共通する部分が多くあります。

おたがい運動の自立を確立し、連帯を強化して参りましょう。

なお、三月一八日の集会は午後一時から虎の門の霞ヶ関ビル内東海大学クラブです。

また、昨年九月一〇日のシンポジウムの報告書は一部千円で販売しています。

連絡先 東京都新宿区新宿二ノ九ノ一

第一家庭マンション八〇二

電話○三三三五六―三三五六

今、体制のめざす 「女子教育」

山形県立鶴岡家政高校
伊藤裕美子

中曽根内閣誕生と前後して浮かび上がって来た諸政策に呼応する形で、教育界でも戦後の民主教育に対する「逆流現象」が懸念されている。その中で、今「女子高校生」にもろにかぶさろうとする波——現行では「女子必修」の家庭科教育を通して作られようとしている波について報告したい。

昨秋ごろから、女子生徒を多く抱える各校管理職が推めようとしているのが、「しつけ教育」とも言うべき教育である。すでに何年か前から兵庫県の私立女子高校・摺河学園・播磨高校で実践され、その報告が「内外教育」や、全国高校長協会家庭部会を通して管理職の手許に届いているはずである。この実践は「内外教育」によると、次のようなものである。「何年か前までは生徒の問題行動に悩んだ同校だった。しかし、一九七四年から『教養科』という教科をおき、『近代女性』として

必要な教養の修得」を目ざし学校全体としてとり組んだ。専任教師として石川島播磨重工の労務教育専門部長を迎え、講義（社会人としての心得など）と、実習（校則を守る・エチケット・礼儀・身なり・言葉づかい）などを中心に、三年間単元化した指導をしている。礼法・ペン習字・珠算の検定制度を設ける。今では非行もなく、そういうしつけ教育を受けた生徒を、企業もべたばめしている。」

この記事には、様々な疑問・問題がある。実際、高教組を通して何人かの同校近辺在住者に聞いたが、「そういう学校は知らない」ということで、地元での評判はそう華々しくはないらしい。この点については字数の関係で、割愛させていただくが、とに角、問題なのは、こういう一方的な報告に、多くの管理職が乗り気になっているということである。そして高校現場の私達は、今、戦後第三の非行のピークを迎え、とりわけ女子非行の急激な増加にふりまわされ、対処に頭を痛めている。おまけに、女子生徒の就職はきびしい冬の時代を迎えている。「しつけ教育」が、非行を防止し、就職状況も好転されてくれるのではないかと、飛びつきたくなるであろうことは、想像に難くない。就職者が大半を占める女子の多い高校にとって、「しつけ教育」

は、「ガンの特効薬」になるだろう。

この播磨の「しつけ教育」の理論的根拠となっているのが、全国高校長協会家庭部会で提唱している「女子の特性を生かす母性教育」である。この部会では、一九七五年から女性解放思想を青少年非行の原因として、家庭科及び女子高校を「母性教育」の牙城にすることを説いていた。女子の特性を生かし、役割分業意識を持つ女子を育てることにより、世の中の混乱が収まるという発想だった。

家庭科の免許をもたない退職校長達が、これからの家庭科教育・女の生き方かくあるべき——と説いていることを、現場の管理職が一斉に取り上げていること、又一方で「男子生徒にも必修できる家庭科」を唱いながら、女子向け家庭科としての一層の強化を謀り共修家庭科の道をとざそうとしていることなどに、不安と疑問の念を抱くのである。

☆☆☆☆

これから各地域、各学校で伝統的な男女の役割分担意識を強化する「母性教育」がすすめられる心配があります。皆さまの地域ではそういう動きはありませんか？ 状況を報告し合い、危険な動きを阻止しましょう！

（編集部）

婦人問題解決のための

新東京行動計画

説明会から

山下 文明

報告会は、策定者（都）側が司会者一人と婦人少年課長以外は全て男性、聴く側は私人を除き全て女性という形で始まった。どこか普通でないですね。

まず、都側から今回の「新東京行為計画」策定に至った経過説明がありました。それに

新東京行動計画から 高校の家庭科について

概要——高等学校の家庭科について、男女の共修をめざし、そのあり方、方法などについて、検討をすすめる。

事業名——高等学校の家庭科における男女共修についての学習内容、方法の検討及び実験研究の実施

によると、一九七八年11月に国際婦人年を契機として「東京都行動計画」ができ、その後、それに基づき諸々の試行錯誤をくり返し、今回の「計画」が作成されたとのことでありました。さらに「新計画」の概要の説明がありました。この説明は「今さら何を」という気持ちを私に持たせてくれました。この「今さら何を」と説明が約一時間続き、その後、一時間に渡り質疑応答もどきものがありました。

質疑応答もどきものの最後に、司会者の御慈悲に与かり発言の機会が与えられました。司会者曰く、「最後まで熱心に聞いてくださった唯一の男性に、時間も少し余りましたので発言してもらいたいと思います。」何という不愉快な言葉よ。これに対して表面上は発言させてもらうことに感謝の意を表明しました。

私は「高校の家庭科」について以下の3点を質問しました。

(1)前回と今回の計画の「高校の家庭科」についての「概要」と「事業名」を比較すると、字句が全く同じで、「目指し」が「めざし」と、漢字が平仮名になっただけであります。この四年半、都教委は何をやってきたのか。

(2)この事業は昭和54年から同56年度に実施

されたことになっているが、「男女共修」の実態はどうなっているか。

(3)「都の家庭科部会」「全国高校長協会家庭部会」は「男女共修」に強硬に反対しているが、「男女共修をめざす」都教委はこういう動きに対し、どのように考えているのか。

以上三点の質問に対し、教育庁の酒井指導部長が、「中学では『技術・家庭』の一部男女共修を実施して効果を上げている。さらに検討する余地はありますが、一定の評価が得られると思います。また、高校の家庭科は現在二十数校の都立高校で実施しています」と答えたにすぎません。これは、私の質問の(2)について一寸答えたに過ぎず、事実誤認があります。「共修」の実施は、都教委の圧力をはね返して行なわれているのです。また、(1)と(3)については全く触れずじまい。

結論を言えば、都教委は、「家庭科の男女共修については『行動計画』に「めざす」と便宜上書いただけで、書いておけば「共修の会」も安心するだろうぐらいに考えていて、「実施」なんてとんでもないことだと考えているに違いない。また、こういう形の説明会などというものは何と味気ないものなんですよ。

婦人問題ブロック会議で

— 共修反対意見に失笑 —

樋口 恵子

女性の集会というとなにも「共修をすすめる会」の一員である私が意識的に発言の場をつくらなくても、必ず会場から共修について多数の意見が出されるようになったのはご同慶の至りである。最近私が出た比較的大規模な集会から一つの例を紹介しよう。

昨年十一月十九日、秋田市で開かれた婦人問題ブロック会議。総理府婦人問題担当室が主催し、全国を三ブロックに分けて、行政担当者、民間の団体指導者が集まる。私がパネラーとして参加したのは、北海道・東北・関東甲信越地域のブロックで、三つの中では最大の規模であった。近ごろは、国連婦人の一〇年の中で、全国都道府県市に、婦人問題担当窓口が設けられ、一方で婦人問題懇話会、婦人問題協議会など名称はさまざまだが、民間の団体・有識者などによる諮問機関を設けているところが多い。私のみるところ、この十年の中での新しい動きは、かつてのように「官製」の動きに乗りやすいと思われてきた

団体だけでなく、右から左まで、大から小まで、多様なグループが参加するようになったことだと思ふ。しかし、それだけ幅が広くなれば、婦人問題に関しても意見が多様であるのはあたりまえのことだ。とくに地域によっては、この問題を抵抗なくひろめるために、有力者の男性を、婦人問題意識のありようにかかわりなく据えていることが多い。

秋田の大会では、事例報告やパネラーの話の中で、性別役割分業を変える柱として家庭科の話が出てきたら、全体討議で、神奈川県

の熟年男性が発言した。
「女性にとって何より大切なことは子どもを育てることであり、とくに子どもが小さいころは育児に専念してほしい。男性は妻の生活を支えるために外で働くのであって、だから家庭科の男女共修は必要ない、と思う。男の子も家事を手伝うのはよいが、学校でわざわざ教える必要はない。やはり、母として主婦として家庭を守る女性がいっかりと学ぶことだ。」

こういう発言が、ともかく出席者が婦人問題担当の行政当局と、男女平等推進の民間団体に限定された会議に出てくることを、嘆くべきか、怒るべきか。私は現状を忘れないためには有効な発言だと思ふことにしている。

何よりの救いは、こういうときの列席者の反応で、怒ったり呆れたり、ましてや同感する人もなく、小波のように笑い声が広がるのが第一の反応だということだ。でもほんとは失笑にせよ「笑っている場合」ではないのかもしれない。「どういえばいばん……」と私が思いめぐらし始める間もなく、地元代表のパネラー長谷山周子さん（五代利矢子さんのお姉様、六十代半ば）が発言した。にこやかに、おおらかに、いかにも地方名流夫人の品位ある女性である。

「家庭科をするのは、男の方が自身のためな

んでございますよ。女がラクをするために勉強していただくのはございません。ご自分で何を召しあがったらいいか、どんなくらし方をしたらいいか、ひとりでもできないようでは一人前の男の方といえないのではないのでしょうか。できなくて、一生の節々で困りになるのは男性ご自身でございます。」

細かいことは忘れてしまったが、ご自分のご夫婦の生活状態まで、ユーモラスに話して下さったので満場爆笑、男性の発言は、今度は失笑ではなく、女性たちの共感のどよめきの中に消されてしまった。ものの言い方、説得のしかた、などについても考えさせられた一幕であった。

世話人会報告

△十二月十八日▽

会報冬号の発送作業をしながら。

●報告事項

- ◆グリーンパンフの進捗状況
- ◆全国教研の日程と会の対応策
- ◆都の婦人問題会議11/30開催された。
- ◆田無「ひと」の会で家庭科問題が取り上げられた。(10ページ参照)

●決定事項

- ◆1/18の授業参観について
お知らせの葉書を出す。その他役割分担を決めた。
- ◆83年度総会について
日時と場所を決定。その他は一月の世話人会で決定する。
- ◆中教審に向けての資料作りをする。担当グループのメンバー決定。
- ◆「共修」の用語の使い方について
- ◆消費者大会、PTA関係へ働きかける担当者。
- ◆世話人会のあとの忘年会の話題は婦人問題と老人問題でした。(石川由紀)

△一月二十九日▽

●報告事項

- ◆1/18公開授業参観の報告
- ◆48団体連絡会の報告
優生保護法反対の要請書を厚生大臣に面会の上手渡したと、地方議会の反応、この法に対する五党の方策を聞く会の様子など。(5ページ参照)
- ◆審議会委員等への婦人参加状況は4・3%
総理府の目標10%へ努力するそうだ。
- ◆全国教研集会報告
- ◆各方面で家事のできない男のことが取り上げられている。

●討議事項

- ◆「共修」ということばについての見解を話し合い、会報に掲載する文案を検討・決定。
 - ◆4/2総会の役割分担決定。(石川由紀)
- △二月十八日▽
- 〔報告事項〕
- ◆家教連の高校家庭科共学の状況調査実施
 - ◆連絡会参加団体による優生保護法改正反対のアップルについての経過報告
 - ◆各地の状況
 - ◆香川県では教組婦人部が研究会を開き、共修を進めようとしている。
 - ◆埼玉県では選択で共学になっている高校は

ふえてきている。新設校の新座の高校など。

◆埼玉県朝霞高校でも家庭科共修の動き。

◆東京都の家庭科研究会で教科調査官が共修ができない理由について資料を用いて講習を行った。

◆東京都の新行動計画は「目指す」が「めざす」に変わっただけ。(13ページ参照)

〔決定事項〕

- ◆会員ゼロの県の教員養成大学の家庭科担当宛にパンフレット、書籍などの案内と入会案内を送る。
- ◆〔検討事項〕
- ◆一九八二年度運動のまとめ
- ◆一九八二年度決算報告
- ◆パンフレット会計「家庭科、男子にも」の会計報告
- ◆一九八三年度の予算概算 (青山和世)

★ ★ ★ ★ ★

★ 家教連研究部による「高校家庭科の男女共学、状況調査」は雑誌「家庭科研究」に掲載されています。ご覧になりたい方は切手570円同封の上、左記へお申し込みください。

★ 東京都渋谷区西原二ノ四一〇 和田典子
電話 〇三・四六六・二六六五

おしらせとお願い

編集部

会費をどうぞノ

間もなく新しい年度を迎えますので、会費の納入をお願いします。

新年度の会費は正式には総会で決定されますが、世話人会では値上げの提案は行いませんので、83年度についても82年度と同じ年額二五〇〇円をおさめください。

納入はできるだけ郵便振替でお願いいたします。振替番号は東京九・一九一八九一です。少額の切手(60円・50円・10円)をお送りくださっても結構です。

なお、カンパはいつでもいくらでも大歓迎です。やはり、できるだけ郵便振替でお願いいたします。(カンパとお書きください)

グリーン・パンフが できましたノ

前号でもおしらせしましたように、夏の全国交流会のレポートをまとめた新しいパンフレットができました。

こうしてひらいた共修への道

——家庭一般を中心に——

グリーンの表紙 B5版32ページです。

いま、地域により、学校により、さまざまなかたちで共修への努力がすすめられています。いろいろな段階での実践例、うまく行かなかった例、成功した例が一冊にまとまっていますので、どなたにも参考にしていただけると幸いです。地域や学校で売りひろめてくださいますように。

一部三〇〇円、送料は一部一七〇円です。お入用の部数をはがきで事務局におしらせください。

世話人になって くださいませんか?

現在は東京附近の世話人が中心になって活動を企画し実施していますが、各地域での運動をもっと強める必要があります。地域での活動をすすめる世話人になってくださいませんか?

東京附近でも、もっと運動を大きく強くして行きたいと思えます。あなたのちえと力と時間を提供してください。

世話人は「日常活動に必要なことがらを決

定し、各地域で運動を推進」することになっていますが、はっきりした義務はありません。月に一回以上東京で開かれる世話人会にできるだけ(遠隔地の方は殆んど無理だと思えます)出席した上、その決定に従って集会を企画実施したり、会報やパンフレットやちらしをつくったり、役所や個人を訪問したり、調査したり、そのほかの活動をしていただきます。(世話人でなくても、これらの活動に参加できるときは参加していただきたいと思っています。)

世話人になってもよいと思いの方は、どうぞ事務局へ郵便でおしらせください。

原稿をどうぞノ

皆様の地域や学校では共修はどのくらい進んでいますか? 共修に関してどんな問題がありますか? なるべく一四〇〇字以内にとめておしらせ下さい(タテ書きで)。

住所変更の おしらせはお早くノ

お引越しの際は、会へのご連絡もどうぞお忘れになりませんように。

お名前が変わるときもよろしく。